

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会  
(中南地区) (第1回) 概要

日時：平成28年9月15日(木)

13:30～15:30

場所：弘前パークホテル 4階 ラ・メエラ

<出席者>

委員

佐々木 健 委員、阿保 淳士 委員、柴田 正人 委員、金枝 尚明 委員、  
吉原 則幸 委員、桑田 純也 委員、鹿内 久人 委員、新谷 貴城 委員、  
一戸 勝美 委員、齋藤 治 委員、安藤 智史 委員、神 洋文 委員、  
古山 哲司 委員(進行役)

オブザーバー

奈良 昌孝 県立弘前高等学校長、 三上 聡 県立弘前中央高等学校長、  
三上 隆裕 県立弘前南高等学校長、 飛内 文代 県立岩木高等学校長、  
松野 洋祐 県立黒石高等学校長、 西館 実 県立柏木農業高等学校長、  
高橋 和雄 県立弘前工業高等学校長、永川 信子 県立黒石商業高等学校長、  
佐藤 昭雄 県立尾上総合高等学校長、泉澤 明德 県立黒石養護学校長

1 開会

2 委嘱状交付

三上教育次長から、各委員へ委嘱状を交付した。

3 教育次長挨拶

三上教育次長から、挨拶があった。

4 事務局説明

(1) 青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会設置要綱

事務局から、資料1について説明した。

(2) 地区意見交換会の進め方と今後のスケジュール

事務局から、資料3により今後のスケジュール等を説明し、了承された。

(3) 高等学校教育改革に係る経緯及び各県立高等学校の状況

事務局から、資料4から資料9について説明した。

進行役からオブザーバーに学校規模による教育活動への影響等について説明を求めた。

- 弘前工業高校は、8学級から学級減があり7学級7学科となった。電子機械科がなくなったことにより若干不自由が生じているものの、規模の面から言えば、7学級あるので部活動、学校行事の面からも大きな影響はない。
- 弘前中央高校の前は六戸高校で3年間校長として勤務していた。六戸高校は、男女のバランスがあまり良くなく、男子が女子の半分程度であった。このため、特に団体の部活動に影響があり、結果として男子の部活動の整理が必要となった。現任校の弘前中央高校では大部分の部活動を設置できている。
- 黒石商業高校は学年4学級である。教科、部活動では他校と同じ状況であるが、学校行事は生徒が成長する場であると感じる。現在は4学級あるので、学校行事でも活気があるが、学級減となるとみんなで協力し合う場が少なくなり、生徒の切磋琢磨する心や一致団結する心が弱まっていくのではないかと感じる。

## 5 意見交換

### (1) 意見発表

委員から、次のような意見があった。

- 第3次実施計画策定の際には、県教育委員会の考え方ありきで進められた。計画が決まってから地元の考えを聞かれてもどうにもならないという状況だと感じたところである。今回は本市の市長にも情報提供いただくなどきめ細かく対応いただいていると感じている。前回のこともあるが、これ以上学級数を減らされたくない。特に中南地区は普通科が少ないので、普通科は減らしてほしくないと感じている。

しかしながら、やはり、子どもの減り方の現実を見ると我々も考えていく必要がある。弘前市においても10年前と比べると小学生は2,200人減少し、中学生も1,100人減っている状況である。市としても教育改革に関する基本計画を打ち出して、小中一貫教育やコミュニティ・スクールの導入、学校統合の検討等も考えているところである。現在の高等学校教育改革もきちんとした進め方だと感じるので、ある程度の学級減はやむを得ないのではないかと考える。

重点校や拠点校については、目的・観点から見ても弘前高校、弘前工業高校が適当であると受け止めている。

高等学校教育を受ける機会の確保と充実した教育環境の整備について、本市においては大学進学に対応する普通科の高校、実践的な職業教育に対応する高校等、様々な分野の高校が設置されている。さらには私立高校の設置もある中で、生徒が進路を選択できる教育環境は確保されていると感じている。

定時制・通信制課程については、当然役割は大きいものであるので引き続き設置してもらいたいと考えるが、現実にそぐわない部分もあるので、まだまだ改善の余地はあると感じている。

- 黒石市には黒石高校と黒石商業高校の2校があり、例えば黒石高校は黒石よされや黒石ねぷた、ボランティア活動、姉妹都市である韓国氷川（ヨンチョン）市の高校生交流、黒石商業高校は同じく黒石よされや黒石ねぷた、姉妹都市の宮古市のボランティア活動など、本市にとって大きな貢献をいただいております。両校とも類を見ない独自の特色ある教育活動をしており、子どもたちの夢を育み、進学も含めて社会へ送り出している現状があると認識している。ただ、現実の生徒数の減少を目の当たりにするとどうしようもないので受け止めていかなければならない。本市も小中学校の適正配置も進めており、子どもの減少に伴った対応をせざるを得ない状況であり、今回の基本方針等についてはやむを得ないものと認識している。

その上で、両校のこれまでの教育活動の実績を見ると、両校の教育活動を生かしていけば良いという願いから、どちらかをなくするというのではなく、他県の例でもあったように、普通科と専門学科の双方の機能を持った総合的な学校という形で、黒石高校と黒石商業高校を一緒にしたような学校ができないものかということをご提案させていただきたい。このことに関しては、本市長も数年前に話していたところである。自分は、様々な課題があり非常に困難なことだろうと感じていたが、実際に取り組んでいるところもあるとのことであり、非常に力強く感じている。可能であれば是非そのような形で対応していただけないかという思いがある。本市は、経済的な事情もあるが、地元の高校に通わせたいという保護者もいることから、そのような保護者の思いにも配慮し両校の教育活動を生かせるような高校を何とか形作ってもらいたい。

- 平川市の生徒数の減少状況であるが、平成28年度の中学校3年生は約280人、平成29年度から31年度までは約260人で推移し、平成32年度は約210人、平成33年度は約270人と少し盛り返すものの、平成34年度から38年度までは約220人から230人で推移すると見込まれる。平川市の中学校卒業生の2割は弘前高校、弘前中央高校、弘前南高校と大学進学に対応した学校に進学している。このことから、普通科等の重点校の配置については、弘前高校の重点校は妥当だと思う。併せて普通科の学校数が少ないので削減については最小限にしてもらいたい。

通学環境についてであるが、平川市には高校所在地から少し遠い地区もあるので、答申にもあるように公共交通機関の状況等も十分配慮した対応をお願いしたい。

充実した教育環境の整備について、学級減に伴い、当然教職員定数が削減になる。本市では、ある小学校が複式学級になるということで、地域の方々と協議しているところである。地域の保護者の方々は子どもたちの基礎学力の定着や部活動の充実について期待しているが、どうしても児童生徒数が減れば教職員数も減ることになる。教職員が児童生徒にこれまで様々な教育指導を行って

いた部分が教職員数の減によりできないということがあるので、教職員の配置については是非手厚い配慮をお願いしたい。

定時制・通信制課程について、本市には尾上総合高校があるが、現在は働きながら学ぶ生徒はもちろん、様々な課題を抱えている生徒も通っており、尾上総合高校は、広く学びの機会を提供しているところである。基本方針には現在の配置を基本とするとあるのでこれまでどおりの配置をお願いしたい。

- 田舎館村には高校はない。中学校を卒業すると近隣の弘前市、黒石市、平川市等の高校に進んでいる。

田舎館村の小学校は6年前に1校に統合した。それは子どもたちが少ないために団体行動、グループ活動ができないからである。例えば、サッカーは11人必要であり、男女合わせて22人いなければ試合形式の練習をできないが、それもできない状態になってしまった。統合した今は様々な活動が可能となり、子どもたちの選択の幅が広がっている。小学校がそのような状況なのであれば、将来的に高校の数は同じでも子どもの数は減るのだから、当然同じような状況になる。したがってもう少し危機意識を持たなくてはならないと思っている。ある程度思い切って学校数を少なくして、各学校の生徒数を増やすことが良い方向だと感じている。そうしなければ競争意識が生まれないと感じる。

また、ある程度は様々な学科を取り入れた学校を作らざるを得ないと感じている。他県の事例の成果等も参考としながら進めてもらいたい。

高校が小規模化し、高校野球でも3校が1つのチームとして出場している例もあるが、将来、高校に入る就学前の子どもたちのためにどうしたら良いのかを前提にして考えていく必要がある。

- 中南地区としては、弘前高校が重点校、弘前工業高校が拠点校で良いと感じる。各家庭の事情を考えると、並行して考えてもらいたいのは経済的負担のことである。例えば、遠い地区から通っている生徒は公共交通機関を使用すれば交通費を無料にすることなどを考えてもらいたい。

定時制・通信制課程については、小学校、中学校でも学校に行けない子どもは多々いるので、学びの機会は確保してもらいたい。

- 自分には、小学校4年生と6年生の子どもがいる。子どもの将来を考えると不安が一杯ある。例えば部活動のことであるが、自分の息子が通学している小学校自体に昨年の秋から野球部がなくなり、複数校が一緒になってクラブチームを作って活動している状態である。指導者も以前とは異なり教員ではない。自分が高校生の際は指導者がいたが、今では教員の数も減っているので指導者がいるのか不安である。自分の娘は新体操に取り組んでいるが、新体操に取り組んでいる中学校は限られている。部活動でも同じ学校単位で取り組めるようにしてもらいたい。

- 重点校、拠点校は、本県の高校教育の要として、新たな教育活動の取組などを発信し、各連携校と教育に関する様々な問題や課題を共有しながら、教育の質の向上を図っていく上でも非常に重要なものであり、配置案についても全県的なバランスが考慮されており、おおむね適正なものであると感じる。地域校という考え方についても通学に配慮されており妥当であると感じている。

充実した教育環境の整備であるが、保護者として感じることは、中南地区は比較的公共交通機関の利便性が良く、また進路の選択肢も確保されていることである。今後生徒数が減少していく中であっても学校配置には配慮してもらいたい。居住地域によって高校へ通学することができない生徒がいないような学校配置を検討してもらいたい。

職業の多様化、生徒の興味・関心の多様化のため、生徒のニーズにあった学科等を選択できる配置をお願いしたい。小規模校になればなるほど、よりきめ細かな指導ができるというものの、より多くの生徒たちと関わり、様々な個性や多様な価値観に触れること、また自立に向けて集団生活を通したいろいろな経験の積み重ねが難しくなっていくと思う。充実した教育環境のためにはお互いに切磋琢磨するという意味においても、統廃合により基本となる学校規模である1学年4学級以上で進めてもらいたい。定時制・通信制課程についても現状の6地区に継続して配置すべきである。

- 重点校、拠点校については、中南地区のこれまでの伝統等を背景にしてある程度決まっており、妥当だと感じている。

充実した教育環境の整備であるが、中南地区の学校配置は、産業、人口などを考慮するとバランスが取れているので良いと思う。しかしながら、重点校の教職員に負荷がかかるのではないかと心配している。主体性のない生徒はますます学力や学習意欲に差が生じるのではないかと心配している。

定時制・通信制課程については、一概には言えないが複雑な家庭環境もあり、これからは県立高校で支えていくのは若干難しいと感じている。ある程度小中学校の段階で手立てを講じ、道筋を立ててあげるべきだと感じている。

高校のPTAとして、これから高校に入る子どもたちのことを考えると、通学に関するコストや安全について関心がある。オール青森ということで考えていくのであれば、バス会社等の産業界も一緒に意見交換できれば、具体性につながるのではないと思う。

また、学習指導要領を前提にしながら進めることは大事だと思うが、生徒が取り残されないようにするとともに教職員の負担を増やさないよう協力していければ良いと感じている。

- 計画そのものが、生徒数減少に伴う行政の効率化を前提としており、その枠に当てはめるために様々な検討を進めているという感じがしてならない。高校教育は中学校等と異なり、独自の青森県らしいカリキュラムが少しはできるのではないかと。青森県基本計画未来を変える挑戦を見ると、将来における青森県

の戦略がある。この戦略を成し遂げるために教育としては、どのような人づくりをしていくのかという観点からの検討が足りないのではないか。

重点校、拠点校についてである。行政の効率化も大切であるが、教育は人づくりであるので、借金をしてでも将来の人づくりをしていくということが大切である。具体的にどのようにすれば良いか考えが浮かばないが、これから地域間競争を勝ち抜く手段としての人づくりが必要である。

重点校、拠点校の配置に関して、重点校は良いが、拠点校については中南地区には工業科しかない。県内各地には様々な産業の形がある。例えば、弘前市は主に園芸である。農業の拠点校候補校がある五所川原市とは違う。中南地区に農業科の拠点校、商業科の拠点校がないのはいかがなものか。重点校はめざすところ是一緒であるが、地域間で産業が違うので、拠点校は各地区に必要であろう。

今後、統廃合が議論になってくると思う。路線バスは、学校がなくなることによって生徒の通学がなくなり、路線を維持できなくなる。結果、地域の住民の交通手段が奪われることになる。また、学校周辺の経済活動もなされなくなる。これらも考慮してもらいたい。

いずれにしても特色ある教育活動など選択肢は様々あって良いと思う。統廃合もあって良いと思うし、例えば、一つの校舎に2つの学校名があっても良いと思う。

- 基本方針については非常に練られたものであると感じている。他県の統合の事例についても非常に参考になると感じた。重点校、拠点校という考え方で進めていくことは納得した。

子どもたちには「あの高校に行ったらこんなことができる」といった視点がある。勉学面はもちろん、スポーツだったり文化活動であったり、子どもたちの夢や希望が叶えられる場として、どんな高校があれば良いのかを考えてもらいたい。小学校段階では高校進学や職業への希望などまだぼんやりしている状態であるが、地域の高校は小学生にとってモデルになると思う。

現在、弘前市教育委員会を中心にコミュニティ・スクールの導入が進められている。先日、秋田県での全国コミュニティ・スクール研究大会に参加した。その中で「学校の統廃合が進む中で、地域と学校をつないでいくのはコミュニティ・スクールの考え方である」との発表があった。より広く地域とつながっていくということであれば高校こそコミュニティ・スクールの考え方である

「地域とともに」という視点で検討していくことが必要ではないかという話を聞いた。高校がなくなると地域の元気がなくなり、人が集まらなくなってしまうので、地域づくりとともに高校の配置も考えていければ良いのではないか。

- 自分は小学校に勤務しているが、少子化に伴う影響や社会の変化への対応は、小学校も高校も同じである。中学校卒業者の減少等を考えれば、基本方針を進めることは妥当ではないかと思う。

今回は県立高等学校教育改革推進計画であり、その対象は、あくまで県立高校である。オール青森とあるが、高校は県立学校だけではなく私立学校もある。私立学校の役割もあるわけだから、私立学校をなくすることはできない。中南地区には弘前学院聖愛高校、柴田女子高校、東奥義塾高校、弘前東高校の4校があり、その1学年当たりの人数は800人弱である。その人数は、10年後に中南地区で減少する中学校卒業予定者709人を数十人上回る人数に相当する。10年後に私立学校がなくなり全て県立高校になるということはないだろうし、私立学校を維持するために県立高校のみが学級減を行うこともできないと思う。県立高校と私立学校が共存する上での折り合いが重要なポイントではないか。そのことが今後、学校数、学級数等の配置シミュレーションにつながるのではないかと思う。

学級の定員について、現行で農業高校、工業高校において35人学級を進めている。基本方針には、生徒数が減少していく中であっても、主体的・協働的な学びの実践を行うとある。つまり、これは、アクティブ・ラーニングを進めるということである。アクティブ・ラーニング実施の成果を果たしていくのであれば、1学級40人では多いのではないか。財政上の課題もあるだろうが、35人学級を進めることも教育環境の充実を図っていく要素となるのではないか。

- 重点校、拠点校については県の考え方で良いのではないか。資料8を見ると5年先、10年先には多くの高校において学級減になるのが見て取れる。学級減になれば大きな反響があるだろうと感じる。

資料には学校規模の標準とある。この学校規模は1学級40人を前提にしていると思う。中学校卒業生数はゆっくり坂を下りるように減っていくのに対し、高校は階段を下りるように40人単位で定員が減っていくというのはいかがなものか。1学級40人というルールは分かるが、30人では駄目なのかという思いもある。

最近、私立高校を第一希望にしている生徒が明らかに増えている。これは何を意味しているのかを県教育委員会も県立高校も私立高校も考える必要がある。

面接指導を行う中で、高校卒業後の進路について尋ねると、多くの生徒は大学に行って勉強したいと言う。職業高校を目指す生徒でもそのように答える。このように考えている生徒と各高校のニーズがどれだけ一致しているのか。

また、成績が上位の生徒の中にも地元の高校を第一希望に進学している生徒も多くいる。それは普通高校だからであり、大学進学を目指しているからである。しかし、大学進学を考えた場合、現実と中学生がイメージしているものが一致しているのかを考えると疑問を感じる。

高校教育を受ける機会の確保については、通学できる環境は必要だろうと感じている。実際に、黒石市内でも多くの私立高校がスクールバスを運行している。路線バスもあるが、複数の高校が協力して、高校というグループでスクー

ルバスを出し、弘前駅までなど通学のために自由に活用できるシステムがあって良いのではないか。

教育を受ける機会の確保と同時に、その学校に進学する生徒の質の確保も必要だと思う。各高校は倍率を高めることに一生懸命になっている。その中で高校としての教育の質の確保も大事だと思う。例えば、高校側で定員に満たなくても、一定の基準に満たなければ不合格ということもやむを得ないのではないか。

生徒のニーズは多様化しているが、そのニーズは生徒が本当に考えた上でのものなのか疑問である。生徒がどのようなニーズを持っていたとしても、人が生きていくためには普遍的なものがあるはずであり、そのようなことを教育できる環境が必要だと思う。

部活動についてであるが、自分の勤務している中学校では、運動部、文化部全てに教員を配置している。学校に部活動がない種目に生徒が出場する場合は、教員は他の部活動の顧問に全てなっているため、校長や教頭が引率している。それは、全ての大会のルールに「その学校の教員が引率する」となっているからである。教職員数にも限りがあるので、生徒の部活動のニーズに応えられない部分もある。生徒数が減れば教員が減る。生徒たちの活動をバックアップできるようにいろいろなルールを変えていかなければならない。

定時制・通信制課程について、本校でも不登校気味の生徒が大変お世話になっており非常にありがたいと思っている。しかし、見方を変えると本当に高校教育なのかと思う時もある。中学校の立場からすれば生徒の進学したい学校に進学してもらいたいのだが、自分の目標を達成するために生徒に頑張らせるということも大事だろうと思う。

## (2) 意見交換

委員から、次のような意見があった。

- 弘前市として、県には高等学校教育改革について重点要望をしている。1つ目は実施計画の策定の段階で各市町村長から直接意見を聞く場を設けてもらいたいということである。

2つ目は、1学級35人体制をお願いしたいということである。学級数を残し、生徒数を減らせば良いと思ったのだが、教職員数は、学級数ではなく生徒数で算定することだった。しかしながら、将来構想検討会議答申では、「オール青森」の視点において、「高等学校の在り方について根本から見つめ直すチャンス」ととらえ、新たな視点で検討する必要がある」とある。やはり青森県は子どもを大事にするということで、青森県独自にそういうシステムを作ってもらいたい。あおもりっ子育みプランも小学校4年生まで拡充した。中学校、高校と拡充するには時間も予算もかかると思うが、青森県は子どもを大切に育てていくということで思い切った策を講じてもらいたい。

3つ目は、弘前市内の高校に観光に関わる学科・コースを設けてもらいたいということである。弘前市でも観光に力を入れており、インバウンドを進めているところである。国際的感覚を身に付けて、地域を大事にし、地域のことをプロデュースしていける生徒を育てるため、仮称であるが、観光科を設けてもらいたい。弘前大学でも人文社会科学部特設講義として、観光に関する「JR東日本寄附講義」を行っている。高校卒業後もそのような機会があることから、オール弘前体制で取り組んでいきたい。

4つ目は、定時制課程についてである。尾上総合高校のⅢ部には、弘前市から進学する生徒は少なく、夜間になることから特に女子はなかなか進学しない現実がある。弘前市内には工業高校の定時制があるが、工業分野ということもあり、女子はなかなか興味を持たず進学しない。したがって、工業高校の定時制を普通科に転換することができないか。どうしても、尾上総合高校で3部制を継続するのであれば、弘前市内にサテライト教室を設けることなどについて考えてもらいたい。

これが弘前市としての要望事項である。今後も皆さんと意見交換していきたい。

- 実施計画を策定する前に首長と意見交換を行うことについて事務局から回答をお願いしたい。
- (事務局) 地区意見交換会が進んでいく過程で各市町村に情報提供をしながら、全首長と意見交換をしたいと考えている。どのような聴取の仕方ができるかということもあるが、できれば個別に伺うこととしたいと考えている。
- 定時制課程について、将来構想検討会議答申では、特別支援学校等との連携や専門スタッフの配置の充実を図るとある。実際には、どのような専門スタッフを配置しているのか。併せてインクルーシブ教育システムの状況について教えてもらいたい。
- (事務局) 定時制課程の高校6校にスクールソーシャルワーカーを配置し、他の学校からの要望に応じて支援を行っているところである。
- インクルーシブ教育システムについて、黒石養護学校としての取組は、知的障害のある在籍児童生徒が居住地校交流という形で地元の小学校・中学校に行き、一緒に学ぶ取組を行っている。様々な交流を通して共に学ぶという形で将来的に共生社会への足がかりにしたいと考えている。高校についても同じように共同及び交流学习として、作業学習を行い、一緒に学んでいるところである。
- 第2回の地区意見交換会は実際の学校配置のシミュレーションを示すことになると思う。次期計画は現在の小学生が高校に入る時期の計画になる。保護者の立場として、学級数は少なく小規模校になったとしても現在設置している高校を全て残した方が良いのか。それとも統合して規模の大きい学校を設置した方が良いのか伺いたい。

○ 規模があれば良いが、小さくても残した方が良いということが希望である。

進行役から「次回の地区意見交換会では、本日の状況を踏まえた資料を作成するとともに、他の地区意見交換会の様子を知らせてほしい。」旨の発言があった。

## 6 閉会